

洋 1 3 - 4 3

「オデット」★★★★

2 0 1 3（平成 2 5）年 3 月 1 9 日鑑

賞<シネ・ヌーヴォ X>

監督：ジョアン・ペドロ・ロドリゲス

オデット（ペドロの子を妊娠したという妄想する女性）／アナ・クリスティーナ・ド・オリヴェイラ

ルイ（ゲイの恋人ペドロを事故で失った男性）／ヌーノ・ギル

ペドロ／ジョアン・カレイラ

テレザ（ペドロの母親）／

アリヘルド（オデットの恋人）／

2 0 0 5 年・ポルトガル映画・9 8 分

配給／

<ポルトガルのロドリゲス監督作品をはじめて！>

「ロドリゲス監督は、ジャン・ジュネやファスビンダーらの系譜を受け継ぐと言われ、ヨーロッパで高く評価されている。その作風は、現実のリアルな描写に根ざしつつ、濃厚な夢や幻想、性的な妄想がきわめてパワフルな映像の中繰り広げられる」と紹介されている。しかし寡聞にして、そんな 1 9 6 6 年にポルトガルで生まれたロドリゲス監督のことを、私は全く知らなかった。

しかして、シネ・ヌーヴォからの試写の案内を見て、ネットを調べると「最も才能豊かな新世代映画作家！」というタイトルで「すごい！すごすぎる！言葉失いそう！世界中のシネフィルが驚喜し、世界中の映画作家が心の底から嫉妬で悶絶すべき作品！明晰な思考の果てに辿り着いた本物の狂気を宿した大傑作！」という書き出しで始まる、本作を絶賛する評論があった。ここまで書かれると、やはり観ておかなくちゃ・・・。

<冒頭のシーンにビックリ！なるほど、なるほど・・・>

映画冒頭、スクリーン上に映し出されているものが何なのか、まず判定がつかない。それが極端なクローズアップで映されていることがわかり、少しずつカメラが引いていくと、そこに映るのが唇であること、さらにそれが男同士が濃厚なキスを交わしている風景であることがわかる。この一人が本作の主人公ルイ（ヌーノ・ギル）であり、もう一人がこの直後に交通事故で死亡するゲイの恋人ペドロ（ジョアン・カレイラ）だ。

続いて展開される別のシークエンスは、巨大なスーパーの中をローラースケートを履いて動き回っていたやけに背が高く、足がバカ長い女性オデット（アナ・クリスティーナ・ド・オリヴェイラ）が恋人のアリヘルドとベットの中で交わす愛の風景。なぜ男性器がバッチリ映ったこんな映像が日本で公開可能なのか私にはわからないが、大島渚監督の『愛のコリーダ』（7 6 年）以来久々に見る（？）こんな男女の愛の光景にビックリ。さらにこの 2 人については、その後展開されるオデットの妊娠をめぐる議論と大ゲンカに注目！なるほど、なるほど、これこそパワフルな映像の中くり広げられる濃厚な夢や幻想、そして性的な妄想・・・。

<同性愛、性的倒錯、青春、純愛、なるほど・・・>

本作のキーワードは同性愛、性的倒錯、青春、純愛の 4 つだが、とりわけ強烈なのが前二者の同性愛と性的倒錯。後二者の青春と純愛は、1 9 6 0 年代～7 0 年代の吉永小百合、浜田光夫の「純愛コンビ」のようなさわやかさが不可欠（？）だが、良くも悪くも本作にはそれがない。当初見せたオデットとアリヘルドとの純愛（？）も、オデットがピルを飲んでなかったと聞かされたアリヘルドが激怒したことによって、すぐにケンカ別れになってしまうから、実にあっけない。それに対して、本作中盤に見せるオデットとルイの「絡み」はかなり異様だし、オデットが亡きペドロの姿に変身したうえで「絡ん」でいく怒涛の展開（？）を見てみると、その精神の異常さにハラハラドキドキ・・・。妊娠などしていないのに「私はペドロの子供を身籠もっている」と錯覚し主張するオデットの姿を見てみると、ゾッとする気持ち・・・。

同性愛と性的倒錯の「極み」は、ラストに見るオデットが男（＝ペドロ）に変身したと見立てた上での、ルイとの倒錯した性行為（？）。冒頭の男同士のキスだけでも私はあまり気持ちのいいものではなかったが、このラストの性行為（？）の生々しさを見てみると、気分が悪くなってくる面も。たしかに本作が同性愛と性的倒錯をテーマにしたすごい問題作であることは認めるものの、やはりお茶漬けと漬け物が大好きな日本人には、本作はちょっと濃すぎるかも・・・？

2 0 1 3（平

成 2 5）年 3 月 2 3 日記